

幕末明治の写真師列伝 第七十七回 武林盛一 その八

ここで札幌の三島常盤の武林写真館について記すと、明治25年(1892)、三島常盤は北海道共進会より褒状を受ける。明治32年(1899)4月、札幌区第二衛生組合伍長に当選、明治34年(1901)、北一条西三丁目に武林写真館支店を設け、弟子の松井千代三をこの支店の責任者とする。同年(1901)も札幌区第二衛生組合伍長に再選されて、明治36年(1903)4月には同組合の副組長なり、明治38年(1905)、副組長に再選される。明治38年(1905)、札幌区会議員に当選。区会議員は二期務め、この間に薄野遊郭の移転問題に取り組んだ。明治39年(1906)3月、札幌区南三条郵便局長に任じられるも、これは翌明治40年3月に依願免官とする。明治40年(1907)3月、日本写真会より木盃を受ける。同年4月、札幌区第二衛生組合長に当選、これは明治42年(1909)4月にも再選している。

札幌市南一条西三丁目の武林写真館は、磐雄の実父、三島常盤が二代目として経営していたが、明治40年(1907)5月10日、札幌の大火のため全焼、これにより札幌の歴史的な風景写真の原板も全て焼失してしまった。翌年(1908)、三島常盤はすぐに写真館を再建する。明治44年5月、札幌区第二火災予防組合長に当選、同年、札幌区伝染病予防委員にも選ばれている。大正元年(1913)、第一回札幌工業品々評会より第二等賞銀牌を受ける。大正4年(1916)、第二回札幌工業品々評会より第二等賞銀牌を受ける。大正7年(1919)、北海道拓殖50年記念博覧会より第二等賞銀牌を受ける。また、同年末には、北一条西七丁目に武林写真館の支店も開設し、こちらは自分の弟子の青木終一に一切の経営を任せることにした。大正8年(1920)、第三回札幌工業品々評会より第二等賞銀牌を受ける。

大正9年(1921)10月、三島常盤は本館を札幌市南二条西一丁目に移転改築し、業務を養嗣子の三島徳次郎に任せて、自身は市内目下山鼻町(札幌市南七条西四丁目)に新築した家に引っ越す。また、この年に設立された北海道写真師連合組合の顧問となる。

三島常盤の妻は、札幌独立教会の熱心なキリスト教徒で、なんとか夫も信徒にしたいと願っていたが、三島常盤は元々、神主でもあったので、妻の勧めを受け付けなかった。長男の磐雄を師の養子に出した後、夫婦で二男、昌司を、愛情を込めて大切に育てていたが、この二男は幼くして病死してしまった。さすがに三島常盤もこの時は気落ちして、これがきっかけとなって牧師の話聞くようになり、ついにキリスト教徒となる。その後は、北海禁酒会の理事や農水小学校の保護

者会役員、共進会の役員などと社会的な活動もするようになり、札幌独立教会の会計方も任されていた。

大正13年(1925)8月27日、それまで入退院を繰り返していた三代目武林写真館本館(南二条西一丁目)の館主、養嗣子の三島徳次郎が腹膜炎のため、享年43歳で亡くなった。そのため、ここは三島常盤の弟子で、すでに南一条西六丁目で写真館を開業していた青木露村(直司)に貸して営業させることにした。このため青木露村は同年(1926)5月1日に六丁目から一丁目に引っ越している。青木露村は三島常盤に命じられて、亡くなった三島徳次郎の妻、春子と6人の子供たち(一夫、信二、敏郎、正、哲哉、千鶴子)の生活についても、写真館の売上の中から月19円を生活費として渡し援助していたという。この青木写真館は、その後、青木露村の長男、青木達郎が継いで、南一条東七丁目で青木写真館を営業している。三島徳次郎の死後は、妻の春子が保険の外交員を始め職を転々としながら苦勞して子弟の養育をしていたが、三島徳次郎の長男、一夫は青木終一に預けられ、二男、信二は、その後、深川市の三島外科医院を開業している。

三島常盤は先妻、まさと後妻、比呂との間に、8男3女が生まれたが、結局、写真業を継ぐ者は一人もいなかった。三島常盤は、その晩年、札幌の自宅を処分して、後妻の比呂と共に札幌で町医者をやっていた五男の寛の家へ行き同居していたのだが、後妻の比呂と息子夫婦とが折り合わず、82歳で東京に行くことになった。そして、吉祥寺にいる永森家(次女、つねの嫁ぎ先)や七男の康七のところを頼ったのだが、ここでも折り合いが悪く、最後は神田小川町にいた長女、光(みつ)のところと一緒に同居することになった。昭和16年(1941)1月17日、三島常盤死去。享年88歳であった。亡くなる頃にはもうボケ老人のようであったという。

【参考文献】

【原本】

東久世通禧『東久世通禧日録』(安政2年(1855)から明治15年(1882)まで)(国会図書館憲政資料室蔵)

『開拓使事業報告』第二編(北海道立文書館蔵)

『開拓使簿書』(北海道立文書館蔵)

『スチルフリート書簡』(北海道大学附属図書館北方資料室蔵)

三島常盤『人物懷想録』(三島徳三氏蔵)

堀三義『北役日誌』(明治8年)

(森重和雄)